

「ワルラスの経済学観と科学への視点」
－英国モラルサイエンスとセイの間で－

鈴木 則稔*

Léon Walras' "Manière" of "Political Economy"
and
His Viewpoint on the Science : Between Moral Science and J.B.Say

Noritoshi SUZUKI*

抄 録

L.ワルラスが注目されるのは、主に一般均衡方程式体系中心の数理モデルについてである。また、現在のよ様な生産過剰の世界では、恐らくはセイの法則との比較におけるワルラス法則が想起されるであろう。ただ、彼の経済学へのイメージは精妙なものである。数理モデルを嚙呑みにせず、これらを読み解くにはその方法論やモデル観、実践との距離感などを知る必要がある。ここでは、その主著『純粹経済学要論』冒頭における当時の経済学スタイルへの彼の批判的見解を解説する。また、ワルラスが強く意識し、当時最も著名なアダム・スミス継承者と目されていたJ.B.セイも検討する。

Abstract

The purpose of this paper is to interpret and understand Léon Walras' attitude toward economics ("political economy" in that time). For Walras, the positioning of "political economy" was a subtle problem, at which was located, in the relation to natural science, art, and "moral science". In order to know his thought, I investigate Walras' "Éléments d'économie politique pure ou Théorie de la richesse sociale," to inspect, and to compare with Jean Baptiste Say's viewpoint of economics, who seemed to be a most famous Adam Smith's "follower".

キーワード：ワルラス、セイ、経済学、自然科学、モラルサイエンス、

JELClassification : B12, B3, B41.

* 経営情報学部経営情報学科、Tsukuba Gakuin University

0. はじめに

この小論の目的は、レオン・ワルラスの経済学観について、主著の焦点となる箇所に対して解題的な読みを行うことである。アダム・スミスやケインズなど英国の伝統とも言える「モラルサイエンス」としての経済学と、現在まで続く新古典派にも通ずる欧州大陸の合理論の流れとも言える「自然科学的」なスタイルの経済学を対置したとき、この二系統から見た際の、ワルラスの位置関係を確認する上での参考を得ることも重要な目的となる。筆者の動機という点で、これは、元々ケインズの思考を研究する作業の一環して行うものでもある。彼らの生きた時代にズレがあるという条件のなかで、経済現象やそれへの考察、また、抱くイメージにどのような違いがあるのか知っておく必要があると考え、このような作業を行い、それをここで一定程度まとめることにした。詳解は割愛するが、とくにケインズの有効需要理論と後に比較で登場するセイの理解には、一部ワルラスが関わりあるということもそれを促している。^(注1)

さて、ワルラスと言えば、その主著『純粋経済学要論（邦訳、"Éléments d'économie politique pure ou Théorie de la richesse sociale"）』で各市場の均衡を、相対価格を内生変数（調整変数）とする連立方程式で表現し、現代にも続く一般均衡論を提唱したことや、それに付随していわゆる「ワルラスの法則」と呼ばれる基本則の発見者として現代の教科書にも登場する人物である。したがってそれゆえに余りにも「純粋理論」つまり抽象のイメージが強く、一部学説史家が「社会主義指向であった」よって必ずしも「自由主義市場経済指向」ではなかったということを強調する程度で、あまり、ワルラス自身の客観的な経済学観や、数式などの”形式論理”と現実世界との関わり等については相対的に重

視されなかった傾向があるように思われる。^(注2) それは、後に示すように、その数理経済学の祖としての業績に比してやや複雑な、言い換えればある種”中途半端”とも理解されかねない位置取りを示しているからかもしれない。^(注3)

以下、ここでは『純粋経済学要論』（以下『要論』と略す）の①序文（第四版）、②第一編第一章、③同編第二章（一部言及する）の順に、ワルラスの経済学に対する姿勢と思われる記述部分を解題して行く。特に上記第一編は「経済学と社会経済学の目的および区分」で、その中の第一章は「スミスの定義とセイの定義」である。^(注4) 第二章は「科学、技術、および道徳の区別」である。第三章以下は徐々に現代で言うマイクロ経済学の世界に入り込んでゆくので、今回の解題のターゲットにはしない。

1. 『要論』序文について

1.1. 構成と強調点：前半

ワルラス『要論』の序文は、現在出版されている邦訳の場合第四版であり、「第四版への序文」となっている。全体として言えることは、現代の大学におけるテキストすなわち、マクロ経済学やマイクロ経済学を一通り学習した者には、ワルラスの頭にあった構想や国家経済、それが言い過ぎなら、社会経済イメージがこの序文から伝わってくるということだ。冒頭に近い部分を引用しよう。邦訳を一部手直し、省略して示す。

・ ・ ・今ここに出来上がったのは ・ ・ ・その内容は、任意数の財の相互交換の場合に各財の市場価格がいかに決定するかという問題のその数学的解法と、需要供給に関する法則の科学的扱い方である。 ・ ・ ・幾分複雑に見えるかもしれない。しかし、 ・ ・ ・このことによって経済現象のシステムはある程度理解されるのである。（『要論』邦訳 p.vi）

これはよく知られた、個々の超過需要を諸価格（相対価格）の連立方程式として並べたワルラス的一般均衡体系を想起させる。このあと、同時期の欧州にていわゆる「限界革命」を担った英国のジェヴォンズや、オーストリーのカール・メンガー、ドイツのゴッセンについてその特徴を、「交換理論」や「効用」「効用最大」などの言葉を交えて、現在のミクロ経済学の基礎をなす彼らの業績に、自らと比較しつつ言及する。

1.2. 構成と強調点：中盤

そこで、ジェヴォンズやゴッセンらの先駆性を認めつつも、自らの学問的基礎は父から、数学的手法などは母国フランスのクールノーから受け継いだことを強調しつつ、「交換」に続いて、「生産」と「資本形成」に話を移す。ただ「生産」に関するこの部分の記述量は少ない。

一方、ワルラスの表現による「新資本の量の決定」または「資本形成」については、わざわざ記述部分の冒頭で「資本形成については、貯蓄関数を経験的に導き出すことをしないで、」とことわっている。つまり、それに続く記述も交えて、人々が市場から得る財からもたらされる効用（消費財の市場）に資本形成（生産財の市場）が直接結びつくイメージで理論構成を行うことを宣言しているのである。ケインズ以降の経済学の図式で言えば「効用→需要決定＝貯蓄決定→資本形成→生産能力→生産」のうち、貯蓄をとばして行くということを明確にしているわけである。

ケインズ以後のテキストで育った論者は違和感を持つ箇所であろうが、ワルラスがイメージする超過需要方程式群の価格による調整機能がスムーズなら、結局生産能力つまり資本形成は、その資本が生み出す財の消費者にとっての評価、効用が全ての始まりなのだから、消費されずに残った所得（貨幣の超過供給＝マイナスの超過需要）は社会の評価つ

まり効用を体現した競争価格群の動きによりスムーズに処理される、つまりは適切な資本の形成に、より多く費やされることになる。したがってわざわざ貯蓄関数という代物を構築する必要はないことになる。逆の立場から見れば、競争と価格の調整が完璧なら、貯蓄から資本形成に至るルートでの”目詰まり”などということは考えなくてもよいことになる。記述部分、

「私はこれを新資本の最大効用の問題と名付けた。これは稀少性と資本自体の価格とを比例せしめることによって数学的に解決される。・・・そしてこのことは、一つの留保のもとに、まさしく自由競争によって生ずる結果なのである。」（『要論』邦訳 p.xi）

がこれを物語っている。^(注1)

貯蓄がこのような視点で扱われることを述べる一方、貨幣に関しては、1874年の初版から、この邦訳になっている1900年の第4版に至るなかで、現代のケインズ理論による貨幣市場イメージに近いものが生まれかかっていることが見て取れる。ただ後で出てくる

「・・・貨幣の供給と需要の均等方程式が他の式とは別にそして経験的なものとしてたてられた。・・・それはこの第四版では、・・・“交換方程式（ミクロ経済学の純粋交換理論と言う意味と理解される；筆者）”^(注2)と最大満足の方程式から理論的に演繹されている。」（『要論』邦訳 p.ix）

と言う表現にあるように、これはまだワルラス体系が貨幣数量説（米国のI. フィッシャー）またはケンブリッジ現金残高方程式（英国のA. マーシャル）の世界の範囲内であることも同時に物語っている。学問は同時多発で変革する場合があると言うが、1900年頃というのは、時代的に現代の理論の寸前まで来て

いた時期なのかも知れない。

それでも、このような自らの貨幣理論に初版以降の修正があったことなどを述べた後、結果としての第四版の構成を提示し、「一八七四—一八七七年版の決定版にほかならない。」(『要論』邦訳 p.x) とこの部分を締めくくる。そして「私の学説は次のように要約することができる。」と長い概要説明(要約)に入る。

1. 3. 序文での『要論』の概要説明：

後半(邦訳 p.x ~ xiv)

場所的に“後半”と示したが、この部分は『要論』構成をなぞっているのだから長い。ただ最初にやはり『要論』を概観した記述「私の学説は次のように要約することができる。・・・」があるので示しておこう。

「純粋経済学は本質的には絶対的な自由競争という仮説的な制度の下における価格決定の理論である。・・・効用をもつとともに量が限られているために価格をもつことができる物質的、非物質的なすべての物の総体は、社会的富を形成する。純粋経済学が同時に社会的富の理論でもあるのはこのゆえにある。」(傍点は邦訳、『要論』邦訳 p.x)

このうち“社会的富”というもの(物質的、非物質的存在双方を含む)が、後ほどワルラスにとっての経済学の目的を構成する鍵になる。序文では引き続きこの社会的富の構成要素の“材質”について、消費財と資本財(非物質を含む)の二種類に内訳られることを示し、それぞれの価格が以下のように決定されることで社会的富の大きさが決まるとしている。

「交換の理論によって消費目的物と消費費用(資本のもたらす用役(サービス；筆者加)であるが生産に用いずに消費目的物とともに

費消されるもの)の価格を決定し、生産の理論によって原料と生産用役の価格(賃金と資本レンタル料と解される；筆者)を決定し、資本形成の理論によって固定資本の価格を決定し、流通の理論によって流動資本の価格を決定する。」(『要論』邦訳 p.xi)

ワルラスの場合“流動資本”を生産者や消費者の“運転資金”と解していた(邦訳 p.322 第29章)ので、それを考え合わせると、上記引用部分は現代経済学で言う、財サービス市場、労働市場、物的資本市場、貨幣市場または金融資産市場での価格決定について、ひとそろい考慮していた体系であることを想像させる。

この「・・・の価格を決定する」の繰り返しあと、「これら価格の決定の仕方は次のとおりである。」と述べ、そのあと現在我々がミクロ経済学の中級以上の教科書で見ると、複数財の同時均衡方程式モデルでの運行やニューメレールの導入に伴う相対価格による不均衡の調整過程が文章のみによって展開される。ここでも説明の終盤で貯蓄が登場するが、しかしそれはすぐさま“新資本”に置き換わる。また、流動資本と貨幣の導入が残された部分として最後に展開される。このあたりは後にケインズがワルラスも“古典派”と見なす証拠となる。^(注3)

1. 4. 序文での『要論』の概要説明：

末尾部分(邦訳 p.xiv ~ xx 末尾)

前段の内容的結びは「以上が、私がかれからでき得るかぎり入念で詳細な説明を与えようとしている理論体系である。」で締めくくり、残された部分では、現在でも寡占理論に「クールノー均衡」などの名を残し、かつワルラスにとっての尊敬すべき先人に当たるA.クールノーやワルラス本人を理解せず、冷遇を続けるフランス学士院への批判を述べ、次いで現代ミクロ経済学での消費理論

の最初に登場する「限界効用均等化の法則」または「最適消費点は限界効用の価格との均等に見出される」「効用が価格を決める」という命題が、ウィーン（カール・メンガー）、英国（スタンリー・ジェヴォンズ）、ローザンヌ（ワルラス自身）らによってほぼ同時に形成され確定した経緯にふれている。とくにそこではジェヴォンズが意識され、結局「生産の最適点」にも同様な法則が適用され「生産物の市場価格が費用や生産量のレベルを規定する」のだが、英国においては、リカードの生産費説に見られるような、逆に見る伝統があることで、これを逆転させたジェヴォンズに追随する者が少ないことを指摘している。このワルラスによる”英国の生産サイド重視”の指摘は、後のケインズの位置付けを考える上で興味深い^(注4)

そのあと、さきほどの自身の『要論』の要約では説明しきれなかった資本形成の理論についてまだ困難が多いこともふくめ、メンガーやバーム・バヴェルクらウィーン学派の見解も交え第二版の記述を採録することで説明としている。このあたりでは「証券の形をとった新資本が・・・価格で貯蓄と交換せらる。」^(注5) など注目すべき部分もあるが、自身認めるように難解である。

序文の最後に、数学を用いることの有効性と、ろくに中身を見ていないような無責任な数学使用への批判に反論し、ワルラス自身は科学としての数理経済学を推進することを述べている。

2. 経済学の定義について

－ “スミスの定義とセイの定義” －

2.1. 目的、区分、性格

この『要論』第一章、Lesson 1 ("Leçon 1re ")のタイトルなどを見て解ることは、アダム・スミスは当然として、当時のフランスまた英国におけるジャン・バティスト・セイの影響

力の大きさである。ワルラスは経済学のあり方の主な流れを検討するため、このふたりの名前をあげて評論している。^(注1)

冒頭でワルラスは最初になすべきこととして、「経済学（ここでは political economy）それ自身、その目的、その区分、その性格、その限界、を定義することである。」と宣言し、章つまり”レッスン”を始めている。それが困難な作業であることを認め、そして今までの、つまり先人の定義についても「科学的真理の徴しである一般的で決定的な承認を得ているものは一つもない。」と断じている。

初めに、同じフランス人の先達であり影響力のあるF.ケネーらフィジオクラート（日本では”重農学派”と訳される）について^(注2)、必ずしも経済学という範囲で論じることの問題を指摘して、アダム・スミスとセイの検討に入る。なお、スミスの言う経済学は"political economy"で、本来は別表記も考慮されるべきであるが、ここではワルラス翻訳の先人に倣い”経済学”とする。ワルラスも『要論』第一編の英語版表題は"Object and Divisions of Political and Social Economy"(邦訳：“経済学の目的および区分”)であり同じ用語で対応している。

2.2. “スミスの定義”

ワルラスのタイトルには“スミスの定義”とあるが、そもそもスミスが"Wealth of Nations"で取り上げたのは「目的」であって「定義」という言葉ではなかった。ワルラスはまず、英仏ともに学界では経済学の祖と見なされるこのアダム・スミスを取り上げ、スミスの言う「経済学の目的」に疑義というより不満を表明している。不備欠落と言うより、“半分欠けているではないか”、“ならばその前に見るべき事があるではないか”という指摘になろう。

スミスは"Wealth of Nations"『国富論（諸国民の富の性質と原因に関する研究）』第四

編序論で、ふたつの「目的」を並列的に提示している。スミスの言う目的は“ふたつの異なる目的”に分かれ、ひとつめは“人民に豊かな収入すなわち生活資料(=subsistence “生活の糧”、ワルラスは“生活手段”とする)を得させること“で、ふたつめは“国家または公共体 (commonwealth) に公共サービスを行うに十分な収入を与えること”である。“経済学は人民と主権者を同時に富ますことを目的とする。”とも述べている。この立場は現在で言えば、経済政策や労働政策、社会政策、また産業政策や市場政策、ひいては社会経済システムのデザイン、究極的には政治システムも関わるだろう。また、分析と応用成果が対等に問われるか、さもなくば後者の方が重視されるものであろう。このスミスが目的に限定したことの心髄は、後にワルラスが『要論』第二章「科学、技術、および道徳の区別」でも意識しているように、多分に“学”というより“技術”重視ということになる。また“国民を富ます”ことが目的で“富の性質”を研究するので、分析研究自体は究極の目的にはならない。この点につき、ワルラスがスミスに異論を呈する。^(注3)

2.3. スミスへの“苦言”

ワルラスのその重要な研究成果が、ほぼそのまま我々のミクロ経済学テキストの一部を構成しているほどであり、彼の研究スタイルでは、自身の言う「純粋経済学」でかつ「数理経済学」つまり抽象的問題設定の数理モデルの分析が主体になっていることは研究者全員の知るところである。逆に言えば、研究目的自体はスミスのものと全く異なることが一目瞭然である。前節の表現を借りれば、国民を富ます方策を知るには、まずは経済を客観的に分析検討する必要がある当面はこれが目的であるべきだろう、と割り切るのがワルラスであったのだろう。

とは言え、ワルラスはかなりのスペースを

使ってスミスとの見解の違いを丁寧に説明しようとする。『要論』第一章の三. でスミス見解の説明をしたあと四. 五. を用い、かつ英国のマルサスとリカード（この二者は政策指向では対立している）まで持ち出してスミスの不備を指摘している。ワルラスの見解を象徴している例が次のような文章である

「スミスが述べている二つはたらきは、幾何学者や天文学者のはたらきではなく、建築者や航海者のそれである。・・・経済学がスミスのというようなもの・・・それは・・・興味のある研究ではあるが、本来の意味の科学ではない。かくして・・・経済学はスミスの述べたものとは異なるものである。収入を与えようと努力する前に、経済学者は純粋に科学的な真理を追究し把握する。」(『要論』邦訳 p.5)。

このあと、スミス自身もワルラスの言う純粋科学的な研究を結局していることと、それがリカードやマルサスら英国の後輩につながっていることも一応強調する。そしてスミスの提示したものは（事実スミスは目的としか言っただけなのだが）、定義ではなく目的だと強調する。なお、ワルラスは次のセイへの見解を提示する前に、仮に人民を富ます方策や制度を研究するにしても、そこに「公正」という条件が問題として立ち上がることも言及している。

2.4. セイの“定義”への“違和感”

この章 (lesson) のタイトル通り、後半はフランスの経済学者、ジャン・バティスト・セイの経済学定義が批評の対象になる。まさに批評になる。ただし、セイの場合も経済学とは言え economics ではなく political economy という当時の表記である。また、セイもどちらかと言うと“目的”中心に見解提示をしている。これに対しワルラスは“セ

イの定義”には賛成できない、結局アダム・スミスと同じ穴に落ちたと断じている。“スミス定義”への批判は、両者の言葉上の見解差が明白なので理解しやすいが、セイについてのワルラスの批判は、スミスに対してほど明瞭ではない。その言い分はやや複雑である。根拠をワルラス自身のひとことで対応させれば、

「スミスの定義は不完全であるに過ぎないが、セイの定義はこれに劣って不正確である。・・・」(邦訳 p.9)

このようになるのだが。ワルラスの主張では、セイの定義は全体として科学、または自然科学を指向しているかのように見えながら、そののなかに、“経済学は、技術でもあるべきだ”という主張を見出したので、セイの定義を批判していることになっている。セイの定義する経済学はワルラス自らの考えるような自然科学ではないと。『要論』にはそのように記述されている(邦訳 p.9～p.11)。

このワルラスがセイの“定義”について噛みついた点について、日本語訳でも英語訳でも、また仏語版でも、ワルラスの気に入らない点というのはわかり辛い。ワルラス言うところの“セイの定義”を並べてみよう。次の「先駆者」とはスミス、「彼」「私」とはセイである。ワルラス曰く、

・・・彼(セイ)はその先駆者の定義についてこう述べた。「私(セイ)はむしろこう言いたい。経済学の目的は、富が形成せられ、分配せられ、消費せられる仕方を知らせることである。」そして実際に彼の著書は『経済学概論、すなわち富が形成せられ、分配せられ、消費せられる仕方の簡単な解説』(Treaté d'économie politique, ou simple exposition de la manière dont se forment, se tribuent, et se consomment les richesses)と題せられ・・・

(ワルラス『要論』邦訳 p.7)

Jean Baptiste Say, ... said of his predecessor's definition, "I prefer to say that the aim of political economy is to show the ways in which wealth is produced, distributed, and consumed." Say's work ... is entitled "Treaté d'économie politique, ou simple exposition de la manière dont se forment, se tribuent, et se consomment les richesses" ... (ジャックフェ訳英語版ワルラス『要論』)

富が形成せられる“仕方”は、ワルラスによる仏語は la manière、ワルラス『要論』英語版では、ways と訳されている。manière の英訳には manner (やり方、仕方 = way) も想定されるが、仏語ではほぼ同音の動詞 manier が“手で意図的に操作する”と言うニュアンスを持っているので、この“仕方”には、私人から見ると、人間が意図的に手を加える技術的側面を感じるのかもしれない。

では、肝心のセイ自身の文章はどうであろうか。ここでは現在手に入る英訳版 "A Treatise on Political Economy" を引用してみよう。この問題についてのセイ自身の見解を示唆する箇所は複数あるが、political economy についての記述は、その冒頭 Introduction にある。

For a long time the science of *politics*, in strictness limited to the investigation of the principles which lay the foundation of the social order, was confounded with **political economy, which unfolds the manner in which wealth is produced, ditributed, and consumed.** (Say, 英訳版 "Treatise" page.xxv)

さらに、これに続き、焦点である“富(wealth)”についてセイは、Wealth, nevertheless, is essentially inde-

pendent of political organization. under every form of government, a state, whose affairs are well administrated, may prosper. (Say, 同上)

このように、良く統治された国が反映すると、政治と経済との関連を述べている。セイにとって、この良き統治をもたらす国は自由主義の国であるようだ。このあとも自由主義優位を想起させる記述が続く。これはスミスの発想とも共通する感覚である。ただ、これだけでは、まだワルラスがなぜあれほどセイを論難するのかわかりにくい。^(注4)そこで、さらにセイの introduction を辿ると、つぎのような記述がある。長いが引用しよう。

In the science of political economy, agriculture, commerce, and manufactures, are considered only in relation to the increase or diminution of wealth, and not in reference to their process of execution. This science indicates the cases in which commerce is truly productive, where whatever is gained by one is lost by another, and where it is profitable to all; it also teaches us to appreciate its several processes, but simply in their results, at which it stops. Besides this knowledge, the merchant must also understand the processes of his art. He must be acquainted with ……their markets, …, the values to be given for them in exchange, and the method of keeping accounts.

The same remark is applicable to the agriculturist, to the manufacturer, and to the practical man of business; to acquire a thorough knowledge of causes and consequences of each phenomenon, the study of political economy is essentially necessary to them all. (Say, 同上 page.xvi)

この文章のように、一方で実用性を強調し、他方で自分（ワルラス）と同じように science= 科学を強調し、客観的分析を論ずる、例えば、

More recently, the inductive method of philosophizing, which in the time of Bacon (Francis; 筆者加), has so much contributed to the advancement of every other science, has been applied to the conduct of our researches in this. The excellence of this method consists in only admitting facts carefully observed, and the consequences rigorously deduced from them; thereby effectually excluding those prejudices and authorities which, in every department of literature and science, have so often been interposed between man and truth. (Say, 同上 page.xvii)

このような記述をするセイにワルラスは強い違和感を感じていたのだろうと推測せざるをえない。当時のワルラスとフランス学界との感情的事情などではなく、セイの記述という、客観的データのみから推測すると、以上のようなことになる。

3. 第2章から一把握の境界一

3.1. “事実の分類”

ワルラスが、その純粹分析に入る前の、彼自身の方法論を語る冒頭部分は第二章まで続く。タイトルは「科学、技術、および道徳の区別」である。このなかでワルラスの立場がより明確になる。ここで、セイやスミス以外の他の論者とも比較を行っている。^(注1)

「我々は科学と技術と道徳を相互に区別しなければならぬ。…技術は助言し、指

導し、処方する。・・・科学は観察し、叙述し、説明する。』・・・（『要論』邦訳 p.17）

また、「（出来事の；筆者加）本体は過ぎ去るが事実は残る」とし、その“事実”を“自然的事実”と人間の意志が関わる“人間的事実”に分け、さらに後者を“人間対自然”の場合と“人間対人間”の場合に分けている。人間の活動はこの二つで、このうち“人間対自然”には技術や産業が対応し、“人間対人間”には精神科学や道徳（科学）が対応すべきものとワルラスは見ている。

このあたりに、セイの支持者がたどり着いた状況を批判してワルラスが「経済学はいかにして同時に自然科学であり、道徳科学であり得るであろうか。（『要論』邦訳 p.11 第一章）」という記述をしたことの要因が見て取れる。

3. 2. 把握の境界

結局、極力当時の感情的軋轢などという事情を避け、このような文献だけからの推測ではあるが、ワルラスとセイの論理的認識差は、人間の個々の意志とは関わりなく生起しうるという意味における自然現象としての経済（現象）を分析対象とした場合、人間的要素とくに“人間対人間”の部分と、その現象を、自然現象の一部と見て、自然科学としての経済学の対象範囲に組み込むか、その部分は道徳科学などに任せるか否かによるものではないかと考えられる。^(注2) セイは経済現象も自然現象の一部と見なし、自然の法則を利用して技術開発をして産業に役立てるごとく、経済の自然法則もビジネスや農業、商業に役立てて当然と考えたのかもしれない。それをワルラスは気に入らなかったのかもしれない。今はそんな“技術”を云々するときではないと。

セイやスミスには、とくにセイにはセイなりの自然哲学はあったわけだが、このワルラ

スが指摘したような観点があることに気づいていたり、意識していたということがあったかいうと、多分無かったのだろう。ただ皮肉なことに、おそらくセイが人間的要素をワルラスからすると過剰に自然科学の対象にしたことの成果のひとつが、形は変わるが後にワルラス自身の『要論』にも登場し、ゴッセン、メンガーやジェヴォンズとともに限界革命の端緒を飾る「効用」という言葉ではなかったか。確かに、セイの「効用」はマルサスが言うように^(注3)、「効用」と当時想定使用されていた意味での「価値」と同一扱いたしということで、問題や矛盾はあったにせよ、アダムスミスの「使用価値」と「交換価値」と言う現代の用語法から見ると扱いにくい状況に一石を投じた点で、大きな意味があったと言える。

4. まとめ－客観性のドグマと形式論理のワナー

このように、『要論』の冒頭2章を読んでゆくと、ワルラスのスミスおよびセイ批判が特に目に付く。その原因のひとつは、個々人の力では及ばない大きな動きという意味での、「自然現象」として経済を観察分析しようというスタイルをもって経済学を「自然科学」と見て、人間的要素の介在のどの部分までをそこに含めるのか、どこから先を道徳科学など別の科学に委ねるのか、その線引きという微妙な問題に収束する可能性を感じる。

また、ワルラス本人は上記の線引き問題としてセイの弟子を批判する形で、経済学が、どうして同時に自然科学と道徳科学であり得るのかという主旨（邦訳 p.10）を述べている。

このあたりでは、経済学を実践に応用するという意味での「技術」という概念も絡んでくるので、実は学問的線引きもさることながら、この「技術」の介入を本当は問題視したのかもしれない。つまり、スミスと同様に「目

的」で実用側面を強調する発想がワルラスとしては許せなかったのかもしれない。先に示したように「社会的富 (wealth)、個人的富 (riches) が増えますよ、経済学を知れば」^(注1)と言わんばかりの表現がセイの序文にはあったわけである。純粋な分析を標榜するワルラスから見ると、「自然科学」と「技術」を混在と言うより、同一視することは危険に見えたのかも知れない。

なお、現代では経済学はどのように言われているか、ワルラスの流れという点、また比較という点でも、私は、サミュエルソン「経済学」を挙げておきたい。^(注2)

「経済学とは、「人々ないしは社会が、貨幣の媒介による場合、よらない場合いずれをも含めて、いくつかの代替的用途をもつ乏しい生産資源を使い、様々な商品を生産して、それらを現在および将来の消費のために社会の色々な人々や集団の間に配分する上で、どのような選択行動をすることになるか」、ということについての研究である。(サミュエルソン「経済学」)」

経済学は「どのような・・・になるか」の研究であり、事実の把握が主体であることは間違いない。サミュエルソンの経済学定義は、新古典派つまりは英国古典派の流れで、言わば「市場重視」の経済学である。したがって厚生経済学伝統の「資源配分」をベースにしたものである。そしてこのサミュエルソン定義の先駆者のひとは、間違いなくケインズの影響を強く受ける前のライオネル・ロビンズ卿の著作である。^(注3) 一見するとミクロ経済学中心的な、ある意味新古典派そのもので、ケインズ理論などが意識にある側から見ると、やや狭いかもしれない。ただ、定義の叙述部分だけではなく、その章全体、周辺や練習問題を見ると、サミュエルソンは意外と広く捉えている事がわかる。つまり経済学の

様々な貢献を唱っている。その鷹揚さは、ここで取り上げたセイの記述にやや近いような気がする。事実、サミュエルソンは上記の自らの定義の1ページ前に、チャールズ・スノー卿を引用して、むしろ「自然科学」と「人文科学」の統合としての経済学のあり方にも言及している。その段落はこのように結ばれている。“われわれは経済学をそれ自体のために学ぶのではなく、それが投げかける光のために学ぶのだ。”

注釈

0. はじめに

(注1) 森嶋 (1983) (Morishima (1977)) 第12章参照。また、オスカー・ランゲによるワルラス法則とセイ法則の数式解釈も参照 (O.Lange et al (eds). "Say's Law: Restatement and Criticism", Studies in Mathematical Economics and Econometrics, Pergamon Press.) このランゲの定式化を想定の上、ケインズが否定したのは結局、ワルラス法則の方でもあったのではないかという立場もある。

(注2) ケインズなどと違い。ワルラスの伝記研究やワルラス経済学の研究書以外の、ミクロ経済学、一般均衡論の解説書全般を見渡してみると、彼の経済学観やこだわりについての言及は少ない。

(注3) ワルラスとフランスの学界には確執があったようだが、ここではその要素は極力排除する。

(注4) 1874年の『要論』初版では、第一編が全8章になっていた。とくに第一章「スミスの定義」、第2章「セイの定義」となっている。これが1900年版では、第一編が全4章で、1874年版のこの2章がひとつになっている。

1. 『要論』序文について

(注1) 森嶋 (1983) 序文など参照。

(注2) 交換方程式というと、貨幣数量説におけるフィッシャー型数量式とも受け取られる可能性があるので、付記した。この場合はあきらかに消費における純粋交換理論である。

(注3) Keynes (1936) (ケインズ『一般理論』) 唯一のワルラス言及部分 (第14章「古典派の利子論」) 参照。この記述からは、利子率の調整が貯蓄の資本化をもたらす

ということで、ワルラスがケインズの言うようにセイ法則側の論者であることがうかがえる。

(注4) ジェヴォンズとワルラスには交流があった。

(注5) ケインズとワルラスの距離感については森嶋(1983)参照。ただし、ワルラスの英語翻訳と研究の第一人者だったジャッフェは森嶋の解釈姿勢には批判的だった。

2. 経済学の定義について

－ “スミスの定義とセイの定義” －

(注1) 『要論』第16章は「スミスとセイの交換価値理論」である。

(注2) フィジオクラートの経済学者としてフランソワ・ケネーの「経済表」が有名だが、全体として“自然派”といった社会のいろいろな側面や、人間の生き方で自然を重視しようという思潮運動の人々と考えた方がよい。

(注3) ただ、スミス『国富論』が客観分析的でなかったかということ、そうとは言えないだろう。素朴な経済モデルが提示されたことは周知の通りである。

(注4) 御崎(2005)は、ワルラスの当時の状況を詳細に述べている。

3. 第2章から－把握の境界－

(注1) シャルル・コックラン(Charles Coquelin)とアドルフ・ブランキ(Adolphe Blanqui)である。

(注2) 前記のブランキは「・・・べき」のような、利益の観点ではなく、公正または公平から見た「あるべきもの」は、道徳科学が受け持つ範囲であると言い切っている。

(注3) マルサス(1950) p.22 参照。

4. まとめ－客観性のドグマと形式論理のワナー

(注1) この「社会的富」「個人的富」の区別表現については、マルサス(1950)参照。マルサスは、セイとは見解対立が多いサイドの人間であった。

(注2) サミュエルソン(1971)第一章 p.9 参照。

(注3) ロビンズ(1960)参照。第一章を参照。

参考文献

Keynes, John Maynard "The General Theory of Employment Interest and Money", McMillan 1936.

(ケインズ J.M. "雇用利子及び貨幣の一般理論"(上)(下)

間宮陽介訳 岩波文庫 2008年1月.)

サミュエルソン P.A. 「経済学」(上) 都留重人訳, 1971, 岩波書店. (Samuelson, P.A. "Economics".)

スミス, A. 「国富論」II, 大河内一男監訳, 中公クラシックス, 中央公論新社.

(Smith Adam, "The Wealth of Nations (An Inquiry Into the Nature and Causes of the Wealth of Nations 1776.)", ed. by Edwin Cannan, 1904, Bantam Dell. A Division of Random House, Inc.)

Say, Jean Baptiste, "A Treatise on Political Economy, Or, The Production, Distribution, and Consumption of Wealth" trans. by C.R. Prinsep 1821, ed. by C.C. Biddle 1834.

セー, J.B. 「恐慌に関する書簡」, 中野正訳, 1950, 世界古典文庫 131, 日本評論社.

間宮陽介 「モラルサイエンスとしての経済学」, 1986, ミネルヴァ書房.

マルサス, T.R. 「経済学における諸定義」 玉野井芳郎訳, 1950, 岩波文庫.

御崎加代子 「ワルラスとセイ－フランスの伝統－」 『彦根論叢』 経済学部創立80周年記念論文集, 2005, 第344, 第345号, pp.109-124.

Morishima, Michio, "WALRAS' ECONOMICS": A Pure Theory of Capital and Money, 1977, Cambridge Univ. Press. (森嶋通夫 「ワルラスの経済学－資本と貨幣の純粹理論－」 西村和雄訳 1983.)

Robbins, Lionel, "An Essay on the Nature and Significance of Economic Science", 1935, MacMillan. (L. ロビンズ 「経済学の本質と意義」 中山伊知郎監修, 辻六兵衛訳, 1960, 東洋経済新報社)

ワルラス, L., 「純粹経済学要論」－社会的富の理論－, 久武雅夫訳, 1983, 岩波書店

(Walras Léon, "Elements d'économie politique pure ou Théorie de la richesse sociale" Paris et Lausanne, 1926) (英訳 Walras Léon, "Elements of Pure Economics or The Theory of Social Wealth" 4th ed. Translated by William Jaffé, 1954, Routledge, London and NY.)

